

墓が つなぐ 地元との関係

都会から里帰りした日。

ふと先祖代々の墓が気になる。

最後に戻れる場所が

あることの安心感。

地元の墓は、都会とむらとを

確かにつないでいる。



田んぼを一望するむらの墓地は、1960年代半ばまで和牛を放牧していた共有地（宮城県大郷町羽生地区）

墓と家があったから、 定年後にUターンを決めた

文・写真 伊藤直樹（愛知県新城市）

実家の墓は遠い存在だった

3年前、長年住んでいた三重県四日市市から生家のある田舎（愛知県新城市）へUターン。妻とふたり、自然の色濃い山村（37戸）での暮らしがスタートしました。

就職で実家を離れ、戻ってくるまで40年。最初の15年くらいは、田舎の両親もそこそ健康で、むらの人たちと一緒に墓守りが続けていたので、私は実家の墓のことを意識することもなく、すべてお任せの遠い存在でした。

その後、両親が体調を崩したため、三重に呼び寄せて同居と介護が始まりましたが、遠く離れた実家の墓守りをする気持ちの余裕はなく、帰省するついでに墓参りをする程度。それでもむらの総代から季節ごとに連絡が入るので、都

合がつくときは一人で飛んで帰って一斉墓掃除や道路作業に参加しました。仕事が忙しくて帰れないときなどは、むらの人が墓の草を抜いてくださっていたこともあり、田舎ならではの世話と気配りに感謝です。

家の先祖をたどって墓を建て直す

同居を始めてから10年後に父が、その5年後に母が他界。父の亡骸は故郷へ連れ帰って、むらの皆さんには迷惑をかけましたが、葬祭ホールではなく、父母が帰ることを望んでいた実家で昔ながらの葬式をあげることができました。この時はじめて、お墓のことを本気で考えたように思います。

父母の葬式を機に、まず祖霊舎（神棚）に並ぶ先祖の霊璽をひっくり返したり、墓に刻んで



旧鳳来町豊岡地区は6集落からなる。集落ごとに墓地を管理し、盆と暮れに住民総出で墓掃除をするところが多い

ある記録を調べてわが家のルーツの表を作成。古くは1754年（江戸時代の宝暦4年）まで一族の歴史をさかのぼることができました。ちょうど、古く傷んできていた墓（祖父が建立）を建て直そうと思っていたので、墓標を刻む際にはこのルーツ調べが参考になりました。

そして新しくなった墓に父の遺骨を納めたとき、何となく自分も田舎に戻ってきて、家と土地、墓のお守りをしようという気持ちになりました。わが家の代々の流れを自分の代で止めてはいけないと覚悟を決めたのです。

昔から変わらない、みんなでの墓守り

定年でUターンした今は、季節ごとの墓参りも時間に余裕をもってできるようになりました。山の中の墓地を見回すと、子孫がむらを出て行



著者（66歳）と妻。祖父が建てた築105年の実家を改修して里山暮らし3年目